
君の幸せを願ってる

ROLL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の幸せを願つてゐる

【Zコード】

N6729C

【作者名】

ROLL

【あらすじ】

彼女はアメリカへ引っ越しことになった。恋人である僕を残して・・・。それから数年、僕はその時の事や彼女との出会いを思い出していく。

第1話・出会い～結ばれる

琴奈が引っ越すと聞いたのは突然の出来事だった。

僕にとってそれは世界がひっくり返った様なものだった。急いで彼女にいつ出発するのかを聞いてみた。

「明後日の朝に行くの・・・」

彼女が暗い声で僕にそう言つたのを覚えてる。

引越しの話を聞いたのは火曜日の朝の事だった。

木曜日も、もちろん学校で見送りにもいけそうになかった。

それでも僕は学校を休んで見送りに行くつもりだった。

彼女が行くのはここからは離れすぎたアメリカだった。

何があつても行かないといけないと僕はそう思つていた。

しかし見送りの話を彼女にすると帰ってきたのは驚きの言葉だった。

「見送りにはこないで」

彼女はその時僕がどれほど傷付いたか知つていただろうか。今になつても時々、僕はそれを考える時がある。

僕達が出会ったのは高校の入学式だった。

希望と不安が入り混じる最初の年のクラスが一緒だった。

最初の席は僕の名前が井上 佑紀と男子の最初だった。

彼女は山本 琴奈と女子の後ろの方だった。

そんな2人が近い席にはなれるはずがなかつた。

そういう訳で僕らは最初の1ヶ月会話すらした事がなかつた。初めて最初に喋った日の事は今でも忘れず覚えている。

あれは入学から1ヶ月以上が過ぎ僕らも学校に慣れている頃だった。その日は久しぶりに大雨で僕の心を憂鬱にしていた。

傘を差しながらも少しづつ濡れながら僕はバスを待っていた。

10分ほどしてバスがやっと来たという時だった。

僕が歩いてきた方向から1人の女の子が走ってきた。

それが琴奈だつたというのは言つまでもない事だ。

僕らは同じバスに乗り込んだ。

雨だつたからかその日はバスが異様に込んでいて、

僕達は2人で1番後ろの長い椅子に一緒に座る事になった。

普段は埋まつてゐるはずのその席が空いていたことに、

僕はその時は何も感じなかつた。

バスに揺られて5分程経つた頃だつた思つ。

隣に座つていた彼女が僕に声をかけてきた。

「ねえ、同じクラスの井上君よね？」

「そうだけど、君は確か山本さんだよね？」

これが僕達が最初に交わした言葉だつた。

1ヶ月も同じクラスで過ごしたというのに、

僕達はまるで初対面同士の人だつた。

「いつもこの時間に帰つてるの？」

彼女は僕にそんな事を聞いてきた。

彼女の声は綺麗で僕はなんとなく声を出すのを躊躇つた。

「うん。学校に残つてもする事ないしね」

「部活とかはやらないんだ？」

その点に関しては僕は考えたことがなかつた。

基本的には人と関わるのは苦手な僕にとって、

部活に入るという道はないに等しかつた。

「山本さんは何か部活に入つてるんだっけ？」

「うん。陸上部よ」

「へえ。種目は何をやつてるの？」

「走り高跳びよ」

「へえ。凄いね」

本当は何が凄いかなんて分からなかつたけど、
僕にはその時そう言っておくことしか出来なかつた。

その後、20分ぐらい僕達はお喋りを続けた。

彼女と話すのは他の人と違ひ安心感みたいなのがあった。それは多分、僕の心が彼女を受け入れようとしていたのかもしれない。

「それじゃ私はここだから」

下りるのは彼女が先だつた。

僕は少し名残惜しい気持ちを残しながらも

「じゃあね」

と、言った。

その時の僕の声がどんなものだったかはもう覚えていない。

バスでの出会いをきっかけに僕達はよく喋るようになった。時間が経つにつれてそれは大切な物となつていった。

そして次第に僕らは友達になり親友へとなつていった。

その頃から僕は彼女に惹かれはじめていたと思う。

彼女のいろんな事を知りたいと思つていたし、

彼女の顔を見ると少しドキドキしたからだ。

結局、その後は特に進展もなく僕達は普通に過ごした。

だけど、入学から半年が過ぎた10月半ば頃それらは変化を見せた。その日も放課後になり僕は学校を出てバス停に向かう所だつた。

バス停に向かう途中にある喫茶店で僕は彼女を見つけた。

そしてその向かい側に1人の男が座っているのも見えた。

それを見た瞬間、僕の心は酷く傷付いた。

その時、僕は既に彼女の事を好きだと自覚していた。

それが大きく災いして僕は心に大きな傷を作つてしまつたのだった。勿論、あの男が彼氏と決まつた訳じやないが、

僕にとつては一緒にいる所を見ただけでもきついものだった。

それを見た次の日から僕は彼女に対する態度が少し冷たくなつた。彼女はそれにすぐ気付き気まずそうにしていた。

そして僕達の距離は時間もかからず遠いものへとなつてしまつた。

結局ほとんど喋らないまま2ヶ月が過ぎていた。

世間ではクリスマスで賑やかだったが僕はそうでもなかつた。

2ヶ月が経つてから僕は彼女との事を後悔していた。

それは決してあんな事になつていなかつたら、

クリスマスと一緒に過ごせたかもしぬないといった気持ちからではない。

ただ、仲良く歩くカップル達を見ていると、

僕にもあれだけ仲良く話せる人がいたのにと思つてしまふものだつた。

結局、クリスマスも過ぎそのまま正月とかも何もなく過ぎていつた。少しだけ変化が見られたのは3学期に入つて2週間経つ頃だつた。僕は熱を出してしまいその日は学校を休むことになった。

元々そんなに体が強くない僕が熱を出すのは毎年のことだつた。今、思えばそんな体质に感謝をすべきなのかもしれない。

夕方の6時を過ぎた頃だつたと思つ。

僕の携帯に一通のメールが届いた。

体がだるかつた僕は見るかどうか迷つたが携帯に手を伸ばし見ることにした。

受信BOXを見るとそこには琴奈とあった。

名前を見た途端、僕は嬉しくなり急いでメールを開いた。

そこには彼女の優しさが伝わってくるような文字が並んでいた。

「体は大丈夫? とても心配したよ。

最近喋つてないからメールしようか迷つたんだけど、どうしても心配だったからメールしたけど迷惑じゃなかつた? とにかく元気の出るもの食べて早く良くなつてね」

彼女の優しさに僕は涙が出そうになつた。

僕は彼女の事を避け傷付けたといふのに、

彼女は僕の事を本当に心配してくれていたのだ。

僕はすぐに返事を出した。

「ありがとう」と「ごめんね」の気持ちを両方告げた。

彼女との関係の回復が僕を元気にしてくれた。

そのおかげで僕は次の日には学校に行けるようになっていた。

僕達は次の日から夢中になつて話した。

今まで話せなかつたぶんを取り戻すかのように喋つた。

そして僕らはまた親友の関係へと戻つていった。

そしてその頃には2月に入り1週間程過ぎていた頃だつた。

2月14日はどことなく生徒は浮ついているようだつた。

勿論、僕にもその理由はしつかりと分かつていて。

バレンタインデーと言う言葉は僕に期待と不安を与えていた。
彼女から貰えるかもしれないという期待。

あの男が彼氏なのかもしれないといった不安。

その2つは僕の中で交じり合い僕を落ち着かなくさせていた。

そして最後の授業も終え放課後となつていて。

その時には2つの気持ちは更に大きくなつていた。

僕はいつもより遅く帰宅の準備をしていつもより遅く教室をでた。

そしていつもよりゆっくりバス停へと向かつていった。

そのおかげでいつもより一つ後のバスに乗るはめになつた。

そこまでしたのに結局、僕にチョコが渡されるることはなかつた。

僕はバスの中で溜息ばかりついていたに違いなかつた。

結局、家に着くまで何も変わつたことはなかつた。

家に着き、僕は鍵を取るためにポストを開けたときだつた。

扉を開くとそこから赤い包装紙につつまれた箱が落ちてきた。

不思議に思いながらも僕がそれを見るとそれは僕が何よりも欲しい物だつた。

包装紙とリボンの間に挟まれたカードに彼女の名前が書いてあつた。

僕は急いで家に入り自分の部屋へと駆け込んだ。

ゆっくり慎重に綺麗に赤い包装紙をはがしていった。

そして出てきた箱を開き中を見てみた。

そこには手作りだと一目見て分かるようなチョコがあった。
手作りだという事が僕をいつそう嬉しくさせた。

僕は急いで彼女にお礼のメールを送った。

30分ほどしてから彼女からの返事が送られてきた。
そこには1行だけの返事があった。

「どういたしまして」

僕はきっと彼女は言葉を選ぶのに苦労したのだと思った。

バレンタインデーを境に僕らの距離は急激に縮まった。

周りから見ればそれはカップルのように見えたのだろう。

クラスメイトから何度も冷やかされた事もあった。

僕は勿論のこと、彼女も嫌そではなかつた。

それが僕の心を嬉しくさせていたのは彼女はしつていたのだろうか。

その頃はもう既に僕の心は彼女でいっぱいになつていた。

想いを伝えたいと思っていたがなかなかそれは出来ずにいた。

それでも僕は3学期最後の日に告白しようと決心していた。

そして特にこれといった事もなく最後の日が訪れてしまった。

その時の僕はと言うと朝からどことなく変だつた。

それは自分でも自覚していたし周りから見てもそうだつたらしい。

クラスメイトの1人には

「お前なんか変だぞ? どうかしたのか?」

そんな質問までされてしまつたぐらいだ。

勿論、何もないよと言つてその場はなんとか凌いだ。

その日の時間の流れは速いのかそれとも遅かったのか、

それは今になつても分かつていなことだつた。

ただ覚えていることといえば先生の話を何も覚えていないことだつた。

最後の授業の時には先生が1人1人の成績表を配つていた。

もう告白の時間が迫つていてる僕は先生の声が聞こえなかつたらしく、

成績表を受け取るという行為だけで笑いものになってしまった。
最後の授業も終わり帰宅の時刻になつて僕の脈は恐ろしく速くなつた。

その日は部活はなく彼女と一緒に帰る約束をしてあつた。

僕はこの日の為にいろいろと計画を練つていたから、
場所とかに問題はなかつたが僕の常態が問題となつていた。
バス停に向かつている途中、話しかける彼女を何度も無視してしまつた。

勿論、僕にそんな事をした覚えはなかつたのだけど。

途中の喫茶店を過ぎて少し歩くと小さな公園があつた。

僕は彼女に寄つていこうと話をして公園へと入つた。

その時の彼女は少しだけ不思議な顔をしていた。

公園には誰もいなくここだけ忘れ去られているようだつた。

鎧付いた滑り台とブランコに鉄棒といった懐かしいものだけがあつた。

僕はブランコに乗り彼女も真似して僕の横のブランコに乗つた。

僕達はそのまま30分程おしゃべりをした。

その時間は僕の人生の中で1番短く感じた瞬間だつたかもしれない。ブランコに揺られお喋りしながら僕は告白のチャンスを伺つていた。でも、こういう事に疎かつた僕にそんな事を分からず時間が過ぎた。

結局、想いを伝えられず公園に入つて1時間が過ぎた。

「そろそろ行こつか

彼女が綺麗な声でそう言つた。

「うん・・・」

どことなく元氣のない声で僕はそう言つた。

僕の返事を聞いて彼女は公園への出口へと歩いていった。

その後姿を見ると僕は突然何か焦りを感じた。

このまま彼女が遠くへ行つてしまふ気がしたからだ。

僕はそれを手繰り寄せたかの様に思い切り叫んだ。

「好きだ」

彼女が驚いた顔をして僕の顔を見た。

「君がずっと好きだった」

いろいろ言葉を考えていたけど何も言えなかつた。

緊張で頭の中が真っ白になつていた。

「・・・・・」

彼女は黙つてゐる。

僕にはもう言つことがなく彼女の言葉を待つだけだつた。

「嬉しい」

彼女がそう言つた。

「私もずっと好きだつた」

僕の心が嬉しさと安堵の気持ちで満たされていく。

世界で1番幸せ者だと思つたし、

僕の人生の中で1番幸せな瞬間だつた。

僕はこの時からずつと疑わずに生きていくことになる。
僕の側には必ず彼女がいるんだと。

第1話・出会い～結ばれる（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
感想等もいたら嬉しいです。
これからもよろしくお願いします。

第2話・約束

告白が成功してから僕は幸せだった。

近くに感じていた彼女を更に近くに感じるようになった。

もちろんこの時はあんな別れが来るなんて思つてもなかつた。

告白から2年1ヶ月が経ち僕達は生へとなつていた。

先輩と後輩に挟まれた1年が僕は3年間の中で1番嫌いだった。
まあ部活動をやつていない僕にとっては関係ないことなんだけど。
どことなく違和感を感じてしまうのだ。

付き合い始めてから僕達は一緒に登下校するようになつた。
朝は同じ時間のバスに決まって乗り帰りは僕は教室に残つてまつた。
待つ時間は長かつたけど苦に感じることはなかつた。
時々、一人で帰らないといけない時はとても寂しくなつた。
まるで空気を失つたような気持ちになつた。
それだけ彼女は僕にとつて大切な人だつたのだ。
でも連續してそんな日が続くような事はなかつたから良かつたと思
う。

そんな幸せな僕らにも時々ぎくしゃくする時もあつた。

初めてそうなつた時には本当に後悔して恐くなつた。

彼女が僕から離れていくんじやないかと本当に心配した。

彼女が簡単に気持ちを変える人ではないのは分かつていただけ。
そんな思いをしたのは付き合つてから2ヶ月経つたころだつた。
その日は彼女の所属する陸上部は休みとなつていた。

僕達は教室で少し喋つた後に教室をでて帰路についた。

話しながら歩き嫌な思い出のある喫茶店を通った時だった。

喫茶店から1人の男が出てきた。

僕と同じ年齢ぐらいで少しだけ背が高かつた。

その男はだいぶ前に彼女と喫茶店にいた男だった。

その男は歩いてる僕らに気付き驚いた顔をしながら彼女の方を向き

「琴奈・・・」

そう小さな声で呟いた。

「前田君・・・」

彼女も同じぐらい小さな声でそう言った。

僕は2人の関係は何か凄く気になつてしまつた。

「久しぶりだな」

前田が彼女にそう話しかけた。

「そうね・・・」

彼女がそうやつて相槌を打つ。

「彼氏か?」

「うん」

肯定の返事をした時の彼女の顔は悲しげだった。

それが僕の心を強く傷付けた。

少しの間3人の間で沈黙が流れた。

それは打破するかのように前田は

「じゃあ俺行くな」

そう言って返事も聞かずに走り去ってしまった。

その後、僕達は無言で歩いた。

何か話したかつたけど言葉は見つからなかつたし彼女もそんな感じ

だつた。

そのまま歩いてバス停にたどり着く直前に僕は聞いた。

「さつきの人誰なの?」

「中学校時代、付き合っていた人」

なんとなく分かっていたけどやっぱり辛かった。

彼女に今まで彼氏がいなかつたなつて考えてた訳ではなかつたけど。

「そう」

「うん・・・」

彼女の声は暗い。何かを思いつめてるような顔だった。

その時の僕はその顔にとてつもない不安を感じた。

そしてそのせいか僕は彼女を傷付ける一言をいつてしまつた。

「もしかして、まだ好きなんじゃないの?」

言つた時の僕は事の重大さがまるつきり分かつていなかつた。

「本氣で言つてるの?」

彼女は少し怒つたようなそれでいて悲しそうな声で言つた。

「悩んだ顔してたじやないか」

僕はつい無機になつて言い返してしまつた。

「・・・・・」

彼女は何も言わず走り出してしまつた。

僕は追いかけることも出来ず1人でバス停に歩いた。

バス停に彼女の姿はなく僕の不安が更に大きくなつた。

ケンカから3日経つても仲直りは出来ないでいた。

毎日夜も眠れず悩んでいたがどうしていいか分からなかつた。

彼女の方は目が合つたら逸らしシカトを決め込んでいた。

「はあ・・・・」

自然にそんな溜息ばかりがこぼれていた。

今思えば、僕達はとても不器用だつたのだ。

仲直りできるチャンスが巡ってきたのはケンカから一週間経つた日
だつた。

その日は6月の最初の水曜日だつた。
僕達の学校では3年に1度の文化祭が1ヶ月前に迫つてゐる所だつた。

成り行き上、僕ら2人そろつて実行委員になつたのだ。

僕はこのチャンスに喜びもしたけど、少し戸惑いもした。

彼女にどうやって接すればいいのか分からなかつた。

普段は長く感じた授業もその日だけは恐ろしく短く感じた。
僕が気づいた時には放課後になつてしまつていた。

放課後になると多くの生徒は教室を出て行く。

残つていた生徒も少しずつ教室から出て行く。

そして結局、僕達2人だけが教室に残つていた。

2人になつてからは気まずい雰囲気が流れていた。

僕も必死に話そうとしたがやはり言葉が見つからなかつた。

彼女は話しかける様子すら見せないので困り果てるばかりだつた。

そのまま30分の時間が流れていつた。

授業の時間とは正反対に時間の流れは恐ろしく遅かつた。

「はあ・・・・

そんな溜息が自然に漏れてしまつ。

それから少し時間は流れだが僕は勇気を出して話しかけた。

「琴奈」

「・・・・

呼びかけたが彼女は返事をしなかつた。

時間が経てば経つほど僕は焦り始め不安になつた。

そんな焦りや不安をかき消すかのように叫ぶようにいつた

「ごめん

「・・・・

彼女はまだ話さうとしない。

僕は自分が思つてることを口にしていつた。

とりあえず彼女に何かを言わないといけない気がした。

「あんな事言つて本当にごめん。

恐かつたんだ。もしかしたら琴奈が離れて行くんじゃないかなつて思つて。

だから冷たく当たつてしまつて・・・本当にごめん

俺はほとんど息継ぎもなしにそつ言つた。

「それって私の事信じなかつたつてこと?」

やつとの事で口を開いてくれたと喜んだが質問には答えられなかつた。

「図星なの？」

「否定はしないよ。あんな事言つちやつたんだし・・・」

「・・・」

彼女はまた黙つてしまつた。

「でも、本当に傷付けるつもりなんかなかつたんだ」

「・・・」

「琴奈が怒るのは分かる。でもそれだけは分かつて欲しいんだ」

「分かつてるわよ」

「え？」

彼女の突然の返事に僕は少し驚いた。

「あなたが人を傷付けるような事を言つ人じやないって

「・・・」

今度は僕が黙つてしまつ番だつた。

「私は分かつてたわよ。でも、でも・・・」

彼女は涙を流していた。

「ごめん・・・」

僕は彼女にそう言つた。

そして彼女の側へと駆け寄つた。

「もう2度と傷付けたりはしないから・・・」

「ちゃんと私の事信じてよね・・・」

「分かつてる」

僕は彼女の震える手に優しく手を置いた。

彼女の震えがしつかりと僕にまで伝わってきた。

彼女はその後、10分程泣きっぱなしになつた。

あの後、泣き止んだ彼女と仕事を済ませ帰路についた。

「久しぶりだね。こうやって一緒に帰るの」

彼女がそんな事を言つた。

僕は頷いて、

「長いケンカだつたからね」

そう言った。

「でも、どんなカップルや夫婦にだってケンカはあるもの」

「大切なのは仲直り出来るかどうかってところだな」

「でも、これからはもうしたくないよね」

「うん。一人で帰るのは寂しくてうんだりだ」

「じゃあ、約束しない?」

「約束?」

「うん。これから一緒にいる中でケンカはしない」

「いつまでも仲良くいるつて事?」

「うん」

「いいよ。約束するよ」

「じゃあ、指出して」

彼女はそう言って右手の小指を僕の前に出した。

僕は頷いて彼女と同じ様に右手の小指を出して。

2人の指をつなげ定番の歌をうたい約束を交わした。

僕は久しぶりに幸せな気持ちになっていた。

勿論、このときの僕は知らなかつた。

彼女との約束は1年も続かず2人は離れ離れになる事を。

第3話・決心

彼女はアメリカへと行つた。

結局、僕は彼女が言つたとおりに見送りには行かなかつた。

彼女が去つていつた日は、3月の1日だつた。

僕も、もうそろそろ3年生にならうとしている時だつた。
僕は彼女との別れで酷く傷つき、少し塞ぎこむようになつた。

それが受験勉強に影響したのだろうか僕は大学受験を一浪した。
結局、1年遅れで希望の大学に進学した。

そして、それから8年が流れた。

僕は今年から弁護士となつた。

大学を卒業後、大学院へ進み司法試験を合格した。
こちらは大学受験とは違つて落ちる事はなかつた。
時々思うのがやつぱり彼女は影響していたんだという事。
ちなみに、彼女と別れて以来僕はいなかつた。
告白されることは何度かあつたのだけど断るばかりだつた。
決して付き合いたくないとかそういう理由ではない。
ただ、告白されると思い出さないようにしていった彼女との記憶が、
僕の中で鮮明に思い出され苦しくなつてしまふからだ。
仮に付き合つたとしても、そういう事ばっかりで、
僕は逆に彼女達を傷付けてしまつ氣がしたからだ。

僕が働いているのは遠山弁護士事務所という所だつた。

僕の他には弁護士であり所長である遠山 健さん。

そして男女一人ずつの弁護士がいた。

ちなみにこの男女の名前は、石黒 学さんと、柳 恵理香さん。

この2人はどうやら恋仲にあるようだった。

僕は今でも時々、彼女を思い出していた。

なるべく忘れるようにしてるんだけどそれでも時に出てくる。告白される時もそうだけど、懐かしい物を見つけた時とか。

例えば、バレンタインデーの日にチョコを見たりとか。

バスを待っている女子高校生を見かけた時とか。

彼女の面影は僕の日常の中で生きているようだった。

仕事の方は至って順調だった。

半年ほどで3つの弁護を担当して2つは勝訴になった。

といつても担当は刑事裁判でなく民事裁判だ。

遺産相続とかそういう類の問題だ。

事件が嫌いな僕にとってはそっちの方が嬉しいけど。

仕事は順調だったが人間関係はそうでもなかつた。

元々、人の少ない事務所だったからだと思うけど、僕には飲み会に行ったりする友達はない。

それを苦に思つことはないから構わないんだけど。そのせいか貯金と有給だけは膨らんでいった。

ある日、僕はコンビニである雑誌を見つけた。

それはいろんな国の特集で表紙はアメリカの何処かの風景だった。

当たり前の様に僕は彼女の事を思い出した。

今はどうしているんだろう。元気なのだろうか。

そんな思いばかりが頭の中に浮かんだ。

そして、会いたいという気持ちも。

家に着いた僕は予定を練つてみた。

もちろんアメリカへ行く予定だ。

その後、どうしても会いたいという気持ちを抑えられなかった。

そして決心した。アメリカに行こうと。

会えるかなんて分からぬ。むしろ会えない確立が高い。

だからせめて計画だけは練つておこうと考えた。

お金は十分で休みも1週間は作れる。

僕は彼女がいそうな場所を必死に考えてみた。

勿論、そんなことをしても何も思いつかなかつた。

「アメリカは広すぎるよ・・・」

ついそんな言葉さえも呟いたりしていた。

あれこれ考えながら3日が経つた。

僕は今、雑誌を見つけたコンビニでそれを読んでいた。

何かを思いつくかもしないという勘を信じてやつてきた。

読んでる内、最初は何も進展はなかつた。

だけど読んでいるうちにあるページで僕の手が止まつた。

そしてそのページに吸い込まれるように長い間見続けた。

その結果、僕は大切なことを思い出した。

そして、それが僕に大きな自信を与えた決心させた。

僕はアメリカに行くことを決めた。

会社に連絡を取り休みを貰い予定も立てた。

向こうではほとんど運任せになるが奇跡を信じようと思つ。

僕は今、アメリカ行きの飛行機の中にいる。

彼女の懐かしい声が僕の耳に届いてきそうだ。

膨らむ期待を胸に抱き僕は外の景色を眺めていた。

第4話・到着とこれから

飛行機の中で僕は彼女との思い出を思い出していた。
長い間のケンカの後の約束はずつと守られていた。

勿論、あの時の僕は今でも続いているだろうと考えていた。
あんなに上手くいって幸せだったのに・・・

時々、彼女は幸せじゃなかつたのだろうかと考える時もある。
そう考へると僕は一体何だつたのだろうと恐くなつてしまつ。

ケンカから3ヶ月が過ぎた9月の初め頃。

僕は毎日、デパートや商店街に通うよつになつていて。
理由は簡単で彼女の誕生日だつたから。

彼女に内緒にしたかつたから、それは一緒に帰宅してからの事だつた。

探し始めた当初はすぐにいい物も見つかると思つたんだけど・・・
思つたより全然上手くいかなかつた。

時々、いいなと思うのはあつたけれど買つこまでは至らなかつた。
「はあ、今日も駄目か・・・」

毎日、そんな咳きをもらしていた。

そして見つからぬまま彼女の誕生日の前日となつた。

僕は今日こそと気合を入れてデパートへ向かつた。

今になつて思うけど毎日デパートに通つてた僕は店の人から何と思
われていたのだろう。

僕はアクセサリーを中心に探すこととした。

しかしネックレスやピアス等たくさんあつて結局悩んでしまつた。

考えた挙句にネックレスにすることにした。

ピアスは彼女はつけないだろうといろいろ考へた結果だつた。
ネックレスと言つのは決まつたが結局迷はめになつた。

ネックレスといつてもやはりいっぽいあつたからだ。

2時間ほど探して僕は気になるのを見つけた。

形はシンプルで飾りとしてエメラルド色の何かが使われていた。

それはとても綺麗な色で彼女に似合いそうだった。

僕は迷わずそれを買うことに決めた。

値段は1万2千と高かつたが彼女が喜ぶならいいと思つた。

プレゼントを買つたいが問題はまだあった。

どうやつて彼女に渡すかだ。

せっかく内緒にして買つたのだから驚かせたい。

でもそんな方法は僕に思いつけず結局当日になつてしまつた。

僕は諦めて普通に渡すこととした。

今考えてみれば普通に渡しても驚くもんだと思つ。

彼女も驚きそして喜んでくれた。

幸せそうなその笑顔は僕をも幸せにした。

だから・・・

僕ら2人が離れ離れになるなんて考えなかつた・・・

昔を思い出している内に眠つていたらしい。

起きてそれに気付くとアナウンスが聞こえてきた。

「この機はまもなく着陸態勢に入ります」

もうアメリカかと僕は思つた。

飛行機から下り荷物をとつたりして僕は一度休むことにした。

飛行場にある喫茶店に入りコーヒーを注文した。

あまりの高さに少し腹立たしく感じたが我慢した。

30分程休み僕は飛行場を出た。

彼女を探すのは明日からの予定だ。

今日はさつさとホテルへ行つて休むつもりだった。

ホテルについてすぐに布団の上に横になった。

僕は少し考え方をしながらそのまま眠りについていった。

彼女に会えるだろうか？

僕を拒絶したりしないだろうか？

期待や不安が僕の胸に溢れていた。

最終話・さよなら

重たい瞼を上げるとそこは知らない部屋だった。

しかし10秒もしてば知ってる部屋となつた。

「そういえばアメリカにいるのか」

知らない内にそんな事を呟いていた。

風呂に入りながら今日の予定を思い出す。

予定というほどのものでもないのだけれど。

僕はカルフォルニア州にいくつもりだ。

そこにあるはずのキュルート公園に。

昔彼女が言つていた。

「私ここに言つてみたいわ」

「どうして？」

僕は彼女に聞いてみた。

「綺麗だから。散歩してみたいの」

「へえ」

「将来子供が出来た時に家族でここを歩きたいわ」

彼女はそう言つて少しだけ顔を赤らめた。

なんとなく僕は嬉しくなつたの覚えてる。

主に地図を頼りに僕はカルフォルニアまで行つた。

しかし公園はというと地図ではどうにかなるものじゃなかつた。

そこで僕はインターネットカフェに入つて調べたりなれない英語で人に尋ねたりした。

大体の位置が掴めた時にはまわりは暗くなつていた。

「今日はここまでか」

僕はそんな事を呟いて近くのホテルに部屋を取つた。

「明日には行けるんだ・・・」

やつと彼女に会えることが出来るんだ。
どれだけこの日を待ち望んだだろう。

「でも・・・」

彼女はどうなんだろ？。

僕のことを忘れたのかな。

違う誰かと付き合ってるのかな。

結局この日も僕の胸には期待と不安が渦巻いていた。

次の日は疲れと安堵感と不安感からか寝坊してしまった。

特に問題がある訳じゃなかつたからよしとする。

お風呂、着替え、朝食、歯磨きをこなしていく。

当分はこのホテルに泊まるつもりでいたから荷物は持たず外にする。

外に出て一度深呼吸する。

「気持ちがいいな」

そんな事を呟いてしまう。

僕はキユルート公園に向かうこととした。

他の事なんてやってられる状況じゃなかつた。

10分ほどでその公園に到着した。

結構大きい公園で彼女が行つたように綺麗だつた。

公園の中には4、5人の子供達がいた。

皆で仲良く遊んでる姿が可愛らしかつた。

そこから遠く離れた所に母親らしき人たちが集まつていた。

こういう所は日本と一緒になんだなつて思う。

僕はしばらくの間交互に子供たちや母親達を見ていた。

すると1人の女の子が母親達の元へと走つていつた。

そして迷わず一人の母親の洋服を引っ張つた。

引っ張られた母親は娘の方を向いた。

その時、その母親の顔が僕にしつかりと見えた。

それはまぎれもなく彼女だつた。

さつきまでは母親達と重なつて見えていなかつたらしい。

僕は絶望した・・・

まさか結婚して子供がいたなんて予想外だつた。
しばらく母親となつている彼女を見つめた。

あの頃の面影を残し大人になつた彼女は綺麗だつた。

僕は帰ることを決めた。

遅くても明日の便で。

彼女は幸せなんだからそれでいい。
何よりも彼女の幸せを望んでいたじやないか。
自分に必死でそう言い聞かせた。

「さよなら」

小さな声でそう呟いた・・・

その時彼女がこっちを向いた。

一瞬目が合つて彼女は驚いた顔をしていた。
僕は踵を返し振り返らずに歩いた。

後ろから僕の名前を呼ぶ声が聞こえる。

それは久しづりに聞いた彼女の声だつた。

涙が出そうなほど悲しいはずなのに声を聞くとほつとした。

次の日の帰りの飛行機はガラガラだつた。

悲しみを忘れる為に少しうるさい方が良かつた。

そして2年の月日が流れた。

僕にはやっと新しい彼女が出来ていた。

今では彼女のことを思い出す回数は減ったと思う。
でも、時々空を見上げて語りかけるんだ。

「君の幸せを僕はずつと願っているから

今度またあの公園へ行つてみよう。

今度は彼女と話したい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6729c/>

君の幸せを願ってる

2010年10月21日22時25分発行